

# 『別雷社歌合』注釈（一）

治承二年戊戌三月十五日己酉、天晴。今日於別雷社広庭、有歌合事。是則当社神主重保之結構也。歌人六十人、分三左右一番之。

作者

中宮大夫隆季	權大納言実房
藤大納言実国	左衛門督時忠
左兵衛督成範	源中納言雅頼
權中納言実綱	右宰相中将実守
宮内卿永範	太皇太后宮權大夫経盛
左京大夫脩範	皇太后宮大夫入道釈阿
法印静賢	前権律師範玄
刑部卿頼輔朝臣	右少将隆房朝臣
左少将有房朝臣	前右衛門佐忠度朝臣
前民部少輔盛方朝臣	前右馬権頭隆信朝臣
右少将公時朝臣	民部少輔定宗
成家	季広
兼綱	敦仲
広言	親盛
僧寂念	佐

『別雷社歌合』注釈（一）

右

観蓮	二条院讚岐
登蓮	俊恵
通親	公重
師光	前斎院大輔
成仲宿禰	資隆
顕家	頼政
季経	経家
僧道因	親宗
経正	僧寂蓮
僧顕昭	仲綱
定家	伊綱
公衡	前斎院備前
智将	僧勝命
僧祐盛	沙弥安性
沙弥行念	重保
題	霞花述懐
判者	入道三品釈阿

以上の歌合本文の冒頭部分に見えるように、『別雷社歌合』は、

武田元治

治承二年（一一七八）三月十五日に、賀茂別雷神社（上賀茂神社）で披講、奉納された歌合である。主催者は、同社の神主、賀茂重保で、判者を釈阿（藤原俊成）が務めている。（後日判と見られる。）

歌題は、霞、花、述懐の三題で、各題三十番、参加した歌人は六十人に及び、ほぼ当時の歌壇を反映するものと言えるであろう。

伝本は、伝寂蓮筆卷子本が優れた本文をもつと見られているが、本文の一部が伝わるのみである。ここでは書陵部蔵五〇一―五八五本を底本とする『新編国歌大観』の本文により、解釈を試みる。ただし、句読点や返り点を新しく付し、判詞を段落に分けるなど、私見によって手を加えたところがある。

## 霞

一番 左勝

1 神がきや榊にかくるしめをまたいかにたなびく霞なるらん

右

観蓮

2 朝霞をしほの山に立ちにけりいはねどしるし春のけしきは

左の歌、榊にかくるしめを又いかに榊引くといへる心、よろしくこそ待るめれ。

右歌、心をかしくはみえ侍るを、をしほの山はただ大原やをしほの山などよめるこそえんにはきこそ侍るを、さらでは山の名もくちをしくや。よりて左をかちとすべし。

## 【通釈】

## 霞

一番 左勝

1 神域は、榊に掛けて標繩を引き渡してあるのに、その上なせ霞がた

なびいて（神域を包んで）いるのだろうか。

右

観蓮

2 朝霞が、小塩の山にかかって見えた、——もう言うまでもなく、春の気配は目立っている。

左の歌は、「榊にかくるしめをまたいかに榊引く」と霞を詠んだ心が、結構なように思います。

右の歌は、その心が面白くは見えますが、小塩の山については、ただ「大原や小塩の山」などと詠んだのが優美に思われますので、そう詠まない小塩の山の名も物足りないだろうかと思えます。それで左の歌を勝としましょう。

【注】○神がき 神域を区切る垣の意から、神域も言う。○榊 昔は常緑樹の総称であるが、特に神事に用いる木を指して言われた。平安時代以後は、神域に見る現在のサカキ（ツバキ科の常緑小高木）を指して言うか。○しめ 神聖な場所を示す標繩。○をしほの山 小塩山。山城の国の歌枕。今の京都市西京区大原野の大原野神社の西方の山。

○大原やをしほの山 この「大原」は、前記の大原野を指す。「大原や小塩の山もけふこそは神世のことも思ひいづらめ」（『古今集』八七一、在原業平）、「大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代の影見む」（『後撰集』一三七三、紀貫之）などと詠まれている。

【考察】左の歌は、神域を示すものとして榊に標繩が引かれているのに、その上どうして霞がたなびいて神域を包むのか、との心であろう。これは霞が神域を包んで外界と区別するように見える様子を取り上げたのであろうが、霞の「たなびく」に「引く」を掛けて、神域を示す標繩が引かれていることに対応する言い方をしていると思う。

この霞の「たなびく」に「引く」を掛ける表現の先例には、例えば次のような歌がある。

あさみどり野辺の霞のたなびくにけふの小松をまかせつるかな  
（『後拾遺集』三〇、源経信）

これは小松を引くことに寄せた場合である。

右の歌は、上の句に、朝霞が小塩の山にかかって見えると言い、それについて下の句に、春の気配が目立って感じられると詠んでいる。平明な詠み様である。ただ、この下句の「言はねどしるし春のけしきは」という表現は、

咲きにけりくちなし色の女郎花言はねどしるし秋のけしきは  
『金葉集』一六九、源縁法師)

の下句の秋を春に換えて借用したようである。

俊成の判詞は、左の歌については、二・三・四句を引いて、その心が「よろしく」と評価している。袖に標繩の引かれているのを、霞のたなびくのと結びつけた趣向を認めただけであろう。

右の歌については、心が「をかしく」見えると言う一方で、「大原や」を初めに置かずに「小塩の山」と言った点を、優美さに欠けると批判している。「注」に挙げたような「大原や小塩の山」と詠んだ歌の先例が、当時の俊成の印象に強く残っていたのであろう。しかし「大原や」を添えず「小塩の山」または「小塩山」とだけ言うのは、広く一般の歌に見られるところで、小塩山の霞を詠んだ、

春霞立ちにけらしな小塩山小松が原のうす緑なる(『長秋詠藻』二〇三)

の一首は、俊成自身の作である。

## 二番 左

3 村雲のたえまの空やうつるらんまだらにみゆる朝霞かな

実房

右勝

讃岐

4 春霞分行くままにをのへなる松のみどりぞ色まさりぬる

左、村雲の空、霞にうつりて、霞の色まだらなる心は、いとをかしく侍。

右、春霞とおける初の句や、いますこし思ふべからむとみえ侍れど、分行くままに松のみどり色まさるらん心すがた、いうには侍るにや。右の勝なるべし。

## 【通釈】

二番 左

実房

3 むら雲の絶え間の空が、映っているのだろうか、まだらに見える朝霞よ。

『別雷社歌合』注釈(一)

右勝

讃岐

4 春霞を分け行くにつれて、峰の松の緑が、色鮮やかに見えてきました。左の歌は、むら雲の空が霞に映って、霞の色が一樣でないという心は、大層面白いと思います。

右の歌は、「春霞」と詠んだ第一句は、もう少し考えた方がよろうと思われませんが、霞を分けて行くにつれて、松の緑が色鮮やかに見えるという一首の心や姿が、優美な作かと思うのです。右の勝とすべきでしょう。

【注】○村雲 群がって動く雲。○をのへ 尾の上。山の頂、峰。

【考察】左の歌は、朝霞が「まだら」に見えるのは、むら雲の絶え間の空が映っているのだろうかと推量している。着想としては目新しいものであろう。

右の歌は、春霞を分けて行くにつれて、峰の松の緑が色濃く見えてきたと、平明にのびやかに詠んでいる。なお、この歌は後に『新続古今集』(三三)に末句「色かはりぬる」の形で見えており、その本歌に次の『古今集』の歌を考える説がある。(『和歌文学大系12』)

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく(六九、よみ人しらず)

俊成の判詞は、左歌については、その心を「いとをかしく」と評している。

右歌については、まず「春霞」という第一句を「今少し思ふべからむ」と指摘している。これは「春」を添える必要がない点言ったのであろうか。むしろ、あまりに平凡すぎると指摘したと見るべきであらうか。いずれにせよ大した問題でないことは俊成も理解していたようである。一首の心・姿を「優」と評価し、右の勝としている。

【備考】二番右歌は『新続古今集』(三三)に、末句「色かはりぬる」の形で収められている。

三番 左勝

実国

5 霞しく志賀の渡をみわたせばいづれかひらの高ねなるらん  
登蓮

6 やへふかく野もせの霞立ちにけりいづくか室の八島なるらん  
左右の霞、ひらのたかね、室の八島、いづれいづくかといへる心  
すがた、定め申しがたし。いづれもなたかき所なるうへに、歌の  
すがた共にをかしく、上の句もとりどりなるべし。よりに持とす。

【通釈】

三番 左持

5 一面にかすんだ、志賀のあたりを見渡すと、どこが比良の高嶺であ  
ろうか、定かでない。  
登蓮

右

登蓮

6 幾重にも深く、野原一面の霞が立ちこめたことだ、——一体どこが  
室の八島であろうか。

左右の霞の歌は、(左は)「比良の高嶺」、(右は)「室の八島」に  
ついて、(左は)「いづれか」、(右は)「いづくか」と詠んだ心や  
姿が似ていて、優劣を判定し難いのです。詠まれた所はいずれも  
有名な所である上に、歌の姿は共に面白く、上の句もそれぞれ特  
色のあるものと言えるであろう。そのため持とする。

【注】○霞しく 一面にかすむ。○志賀の渡 「志賀」は、近江の国  
の歌枕。今の滋賀県の大津市や滋賀郡あたりの地。「渡」は、漢字で  
表記されているが、その辺一帯、あたりの意であろう。○ひらの高  
ね 比良の高嶺。近江の国の歌枕。比叡山の北に位置する連山。○野  
もせの 野も狭の。野原一面の。『後撰集』の「秋くれば野もせに虫  
の織りみだる声のあやをばたれか着るらん」(二六二)の「野もせ」  
について、『奥義抄』(中)では、「野もせとは野にみちたりと言ふ心  
なり。多くひまなきなり」と注する。○室の八島 下野の国の歌枕。  
今の栃木県栃木市の大神神社の地か。野中の清水から水蒸気の立つの  
が煙のように見える(元永元年十月二日『内大臣家歌合』恋一番俊頼  
判詞)と言われ、「ケブリタエズタツ」(『和歌初学抄』所名)所とし

て歌に詠まれた。なお『袖中抄』(第十八)の説を受け継いだと思わ  
れる『色葉和難集』(巻五)には、一説として「むろのやしまとは、  
かまどをいふなり。かまをぬりこめたるを、むろといふ。室なり。か  
まをば、やしまといふなり。」と注している。

【考察】この左右の歌は、左は「比良の高嶺」を、右は「室の八島」  
を詠み入れた霞の歌であるが、俊成も判詞で言うとおり、似たところ  
があり、これらの歌枕の地が、霞が一面に立ちこめたために、どこに  
あるのか定かでないとの心を詠んでいる。

俊成の判詞は、そういう共通性を認めた上で、「歌の姿共にをかし  
く」などと評価し、持としている。

四番

左持

時忠

7 をしほ山小松が原のかすめるははや大原に春はきにけり

右

俊恵

8 しめはへてしづのあらまく小山田の春のかこひは霞なりけり

左のをしほの山の霞、をかしくこそ思ひやられ侍れ。はや大原に  
といへるわたりや、かのせれうの里わたりの大原にやときこえ侍  
らん。これは大原にこそ侍るめれ。

右、春のかこひといへる、つよきやうには侍るを、しめはへてと  
おき、しづのあらまくなどいへるすがた、かの田夫の花のかげに  
やすめらん心ちして、かたむ事かたし。是をなすらへて又持とす  
べし。

【通釈】

四番

左持

時忠

7 小塩山の、小松の原がかすんでいるのは、もう大原に春が来たのだ。  
右

右

俊恵

8 標繩を引いて、山家の者が種をまく山田を、春に囲うのは、霞であっ  
た。

左の歌の小塩山の霞の情景は、まことに面白く思いやられます。

「はや大原に」と詠んでいるあたりは、あの芹生せりうの里辺りの大原のことかと思われるでしょう。しかし、ここに詠まれているのは、古来の大原であるはずだ。

右の歌は、「春のかこひ」と詠んでいるのが、優れているように思われますけれど、「しめはへて」と詠み、「しづのあらまく」などと詠んでいる歌の姿は、あの『古今集』の序に言う「農夫が花の陰で休んでいるような（ひなびたところのある）感じがして、勝とすることは難しい。こういう点を見比べて、これも持としようと思う。」

【注】○をしほ山 一番の「注」参照。○小松が原 「大原やをしほの山の小松原はや木高こだかかれ千代の影見む」（『後撰集』一三七三、紀貫之）の歌以来、小塩山にある松原として歌に詠まれる。○大原 小塩山のある「大原」は、藤原氏の氏神とする奈良の春日大社を長岡京遷都の際に分祠した大原野神社の所在地。今の京都市西京区大原野。一番の「注」参照。○しめはへて 標延しめはへて。（占有する土地であることを示す標識として）標繩しめなわを引きめぐらして。○しづ 賤しづ。身分の低い者。○あらまく 田を耕かさずに種をまく。○小山田 山の中の田。「小」（を）は接頭語。○せれうの里わたりの大原 「芹生せりうの里」のある辺りの大原。「芹生の里」は、山城の国の歌枕で、今の京都市左京区大原の「大原の里」の一部。左歌に詠まれた西山の大原が、三代集以来の歌枕であるのに対して、この洛北の大原は、平安時代後期に隠者の住み着く土地になってから歌に詠まれることが多くなり、平安時代末期以後は歌枕として西山の大原を圧倒した。「大原やまだすみがまもならはねばわが宿のみぞけふりたえたる」（『詞花集』三六七、良運よき法師）などを始め、炭を焼いたりする山里の様子が詠まれた。○田夫の花のかけにやすめらん心こころ 大伴黒主の歌について、『古今集』の仮名序に、「そのさまいやし。いはば薪おへる山人の花のかけに休めるがごとし」と言い、真名序に、「頗すこぶ有レ逸興レ、而体甚レ鄙シ。如シ田夫之息（やすメルガ）、花前（ハナノ）也。」と言っているのによる。

【考察】左の歌は、小塩山の小松が原がかすんで見えるので、大原に春が来たと感じた旨を、平明に詠んでいる。着想も表現も一番右の歌と似たところがある。

右の歌は、山田の周りを囲むように霞が立ちこめているのを、「春のかこひ」と見立ててとらえた点に、眼目を置く作であろう。その山田を「標しめはへて賤しづのあらまく小山田」と言ったのは、山家の民の田作りの様子をよく表していると思えるが、次のような先例がある。

あら小田に細谷川をまかすればひく標繩しめなわにもりつつぞゆく（『金葉集』七三、源経信）

鳴なのゐる野沢の小田をうちかへし種まきてけり標はへて見ゆ（『金葉集』七四、津守国基）

俊成の判詞は、左歌については、「をかしく」思いやられると評する。そこに詠まれた大原が洛北の大原でないことにこだわって記しているのは、不要のこととも思われるが、「注」で触れたように、歌枕として洛北の大原が西山の大原を圧倒する傾向にあったのに対して、三代集以来の伝統を重んじる立場から記したのではないかと思う。

右歌については、山田をめぐる霞を「春のかこひ」と見立てた点を評価する一方、「標はへて賤のあらまく小山田」と詠んだのを、『古今集』の序の言葉を引きいて優雅に欠ける姿と見、勝とし難いと、保守的な態度を示している。

五番 左持 成範

9 いつしかと音羽の山のかすめるは春をこめてや立ちわたるらん 通親

左の歌、すがた詞いうには侍らめど、春をこめてやといへる心や、心えても侍らざらん。

右歌、詞つづきことにやすらかにほくだれど、霞の中は櫛のかくれざらん心、をかしく聞ゆ。猶又持とす。

【通釈】

五番 左持

成 範

9 一つの間に早くも、音羽山がかすんで見えるのは、春を包んで霞が立ちこめているのであろうか。

右

10 春霞が立ちこめてはいるが、榊さかきは葉の香りが高いので、隠れようもなかった。

左の歌は、姿なり言葉なりが優美とは言えるでしょうが、「春をこめてや」と詠んだ心は、納得しかねるところがあろうかと思えます。

右の歌は、言葉の続け様が殊にやすやすと詠み下されていると見えるが、霞の中でも榊が隠れはしないという着想は、面白く思われる。やはりこれも持とする。

【注】○音羽の山 音羽山。山城の国の歌枕。山城と近江の境、今の京都市山科区と滋賀県大津市の境にある山。○榊葉のかをかうばし

み 榊の葉の香りがよいので。神楽歌の「榊」に、「榊葉の香をかぐはしみとめくれば八十やそうち氏人ぞまとゐせりける」の歌詞が見え、『拾遺集』（五七七）にも収められる。なお、サカキは上代には広く常緑樹を言い、神域に見る今のサカキを言うのはその後のようである。

【考察】左の歌は、音羽山がかすんで見えることから春のおとずれを感じた旨を詠んだ作であるが、これと似寄りの歌の先例として、次の『後拾遺集』の歌があり、それによって詠まれた可能性が考えられる。

逢坂あふさかの関をや春もこえつらん音羽の山の今日はかすめる（四、橘俊綱、「春立つ日よみ侍りける」）

逢坂の関は、音羽山の北に位置し、京都から見れば東方に当たる。春は東から来るといって詠まれた一首で、この点は当面の左歌も同様と思われる。また左歌は用語や発想形式の上で次の『金葉集』の歌と似通うところがあり、その影響を受けた可能性も考えられる。

いつしかとあけゆく空のかすめるは天あまの戸よりや春は立つらん

（三、藤原顕仲）

右の歌は、春霞が立ちこめているが、榊は葉の香りが高いので隠れようもない旨を詠んでいる。これは神楽歌に「榊葉の香をかぐはしみ」と歌われているのをとり入れて、新しく生かした作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、その姿言葉は「優」とも見られる

が、霞が「春をこめてや（立ちわたるらん）」と詠んだ心が納得しかねると指摘している。これは春という大きく実体のない存在を霞が包みこんだとする点を、不自然と見て問題にしたものであろうか。

右歌については、言葉を「やすらかに」続けて詠み下しているが、着想が「をかしく」思われると言い、持と判定している。

六番 左

雅 頼

11 いつしかと春めく人もゆかしきに立ちこめてける朝霞かな

右勝

公 重

12 小倉山霞にこめてみえねどもとなせの滝の声は聞ゆる

左、やすらかにいひくだして、ことなるとがなきなるべし。

右、ふかき心はなけれど、小倉山霞にこめてなどいへるも、つつきよろしく侍るにや。仍右の勝にや侍らん。

【通釈】

六番 左

雅 頼

11 春が来るかと、春めく人たちも心を引かれる折柄、朝霞が一面に立ちこめたことだ。

右勝

公 重

12 小倉山は、霞に包まれて見えないが、戸無瀬となしの滝の音だけは、紛れず聞こえる。

左の歌は、安らかに詠み下していて、目立った欠点のない作であらう。

右の歌は、深い心はないけれど、「小倉山霞にこめて」などと詠んでいるのも、言葉の続け様が結構なように見えます。それで、

右の勝であろうかと思いません。

【注】○小倉山 をぐらやま。山城の国の歌枕。今の京都市右京区にある山。嵯峨の西部、大井川（大堰川）の北に位置し、川を隔てて嵐山に對する。○となせ 戸無瀬。山城の国の歌枕。今の京都市西京区の大井川、嵐山辺の部分名称。「となせの滝」は、嵐山から流れてきた水が大井川に落ちる所にあつたらしいが、現在は位置不明。

【考察】左の歌は、春を待つ人の心に応じるように朝霞が立ちこめたと詠む。素直な詠み様の作であらう。

右の歌は、小倉山は霞に包まれて見えないが、戸無瀬の滝の音は聞こえたと詠む。戸無瀬の滝の所在を音によって知るといふ着想の先例には、

大井川散るもみち葉にうづもれて戸無瀬の滝は音のみぞする  
〔金葉集〕二五三、大中臣公長

があり、そこでは水を見えなくするものを紅葉とする。それに対してこの右歌では山を隠すものを霞とし、題に合わせて先例の着想を新しく生かしている。

俊成の判詞は、左歌を「安らかに」詠み下して特に欠点はないとしながらも、右歌の「小倉山霞にこめて」などと詠んだ言葉続きを「よろしく」と評価し、勝としている。

七番 左持

13 今朝みれば霞にくもるかがみ山はるるはみがく心地こそすれ  
右 師光

14 御かりせしもずの原の朝霞其くさぐきやいつくなるらん

左歌、詞実文花あひかねてをかしくはみえ侍らめど、但、霞にくもるとはおきながら、はれぬるを歌のおもてとして、かがみ山を賞せぬやうにみえ侍らん。

右歌、姿柿本の風を伝へて、ことばをふぢのうらばにかけたり。但、霞は春のうちにてだにあらば早晚心にあるべけれど、此題は

猶春の初ならんやよろしからん。此歌くれの春などやいかが。

左右共によるしき歌の、いささかうたがひ有るによりて、持とす。  
【通釈】

七番 左持

13 今朝見ると、霞におおわれた鏡山の、晴れる様子は、鏡を磨くかと思われた。

14 み狩の事のあつた、もず野の原に、朝霞がたなびいている。鴟が草に身を隠したのは、どの辺りだろうか。

左の歌は、花も実もある詠み様で、面白くは見えるようですが、ただ、「霞にくもる（鏡山）」と言っていないながら、霞の晴れたことを歌の前面に出して（霞のかかる）鏡山を賞美することが少ないように見える（という問題がある）でしょうか。

右の歌は、歌の姿に柿本人麻呂の風を伝え、また言葉を藤原氏の末流に当たる私（俊成）の歌から取り入れて詠んでいる。ただ、霞は春の季節でさえあれば、早春か晩春かは任意のことになるはずだが、この霞の題の場合は、やはり春の早いころのものとして詠むのがよろしからうかと思う。右の歌は暮春などの情景かと思うが、いかがであらう。

それで左右ともに結構な歌だが、いずれも少々疑問があるので、持とする。

【注】○かがみ山 鏡山。近江の国の歌枕。今の滋賀県の蒲生郡竜王町と野洲郡野洲町との境にある山。○御かり み狩。天皇や皇子などの狩をすることを敬って言う語。『万葉集』の柿本人麻呂などの歌に用例が見られる。○もずの原 『和歌童蒙抄』に「もずの」を山城

の国にある野とするが、不詳。後の「くさぐき」との関係から見ても、鴟のいる野原として詠まれたと思われる。○くさぐき 草の中にくぐり入ること。「くき」は、くぐる意の動詞「くく」の連用形の名詞化したもの。「もずのくさぐき」は、鴟が春に山に移って姿を見せなく

なることを、草にもぐり隠れたと見て言った語。『万葉集』(二八九七)に「春さればも草ぐき見えずとも我は見やらむ君があたりをば」の歌がある。俊成はこの語を復活させて、「たのめこし野辺の道芝夏深しいづくなるらんも草ぐき」と詠んでいる。(この歌は『長秋詠藻』三五六、『千載集』七九五に見えるが、それらの詞書によれば、もと後白河院の法住寺殿での五月の供花会の時の歌会で詠まれたものである。)○詞実文花『新編国歌大観』では「材実文花」とするが、意味が通じないので、『平安朝歌合大成』の「詞実文花」の語形を本文に出した。これによれば、文辞の実(まこと)と花(美しさ)の意か。ただ「詞実」の用例は他に見だし難い。「文花義実」の語なら、長承三年『中宮亮頭輔家歌合』恋二番の基俊の判詞に見えるが。○柿本の風 柿本人麻呂の歌風。○ふちのうら葉 本来は「藤の末葉」を言う語で、『後撰集』の歌(一〇〇〇)などにも詠まれているが、ここでは前記のように藤原俊成に「いづくなるらんも草ぐき」の歌があり、それが右歌に影響したと見られることから、俊成が自身を藤原氏の末流として言ったもの。

【考察】左の歌は、『堀河百首』の源国信の歌、

おしなべて春の霞のたつ時はかがみの山もくもるなりけり(三五) によって詠まれたかと思われる。そして新しく、「晴るるは磨く心地」がすると詠む。山の名の「鏡」の縁で「くもる」と併せて「磨く」と言うのを表現上の節にした作である。

右の歌は、かつて「み狩」の行なわれたもずの原を朝霞が包んでいて、鶉の「くさぐき」もどの辺りなのか、定かでないと思われ。「み狩」「くさぐき」などの語が用いられ万葉風の感じられる作だが、下句「其くさぐきやいづくなるらん」は、「注」に引いた俊成の歌の下句「いづくなるらんも草ぐき」の影響があると思われる。

俊成の判詞は、左歌については、「をかしく」は見えるにせよ、霞にくもる鏡山を賞美する態度が乏しい点を問題と見たようである。

右歌については、人麻呂風の詠み様だが、俊成の旧作の表現の影響

もある点を挙げる。ただ霞の題は早春の景として詠むのがよからうと言う。「もずの草ぐき」を俊成は早春より先の季節のことと考えていたようである。

八番 左持 実守

15 昨日まで雪降りつみしみよしの春知りがほに今朝はかすめる

右 大輔

16 霞たつこせの春の玉椿つらねもあへずみえみ見えずみ

左歌、めづらしきふしにあらねど、詞つづきことなるとがなく、優に待るべし。

右、巨勢の春のなごいへるすがた、ことに不被「庶幾」のこと葉にはみえ侍れど、彼のつらつらつばきつらつらにみれどもあかずこせの春野はとかやいへる万葉集の歌を思へるなるべし。ひとへに古風を存せるうへに、霞のたえまたえまつらねもあへぬ、心とどめてみゆ。よりに又持とす。

【通釈】

八番 左持 実守

15 昨日まで、雪の降り積もっていた吉野だが、いかにも春を知り顔に、今朝はかすんで見える。

右 大輔

16 霞のかかる、巨勢の春野に連なる玉椿は、連なりきれない姿に見える、——(霞の間に)見えたり見えなかつたりして。

左の歌は、別に目新しい見所があるわけではないが、言葉続きにとりたてた欠点もなく、優美な作でしょう。

右の歌は、「巨勢の春野の」などと詠んだ様子が、あまり望ましくない言葉遣いとは思われるのですが、あの「(河上の)つらつら椿つらつらに見れどもあかず巨勢の春野は」とか詠んだ『万葉集』の歌を念頭に置いての作であろう。専ら万葉の古風を保っている上に、霞の絶え間絶え間のことなので玉椿が連なりきれない



どと詠んだ歌の姿も、「心あらん人に見せばや(津の国の難波の浦の春のけしきを)」と(能因が)詠んだ時の様子まで思いやられて、並一通りの作とは思われませんので、やはりこれも持としま

【注】○さほ姫 佐保姫。春の女神。佐保山が平城京の東北に位置し、

五行説で東は春に当たるところから、佐保姫が春の女神とされた。○

あそふいとゆふ かげろうを意味する語。「いとゆふ」だけでその意

味に用いられるが、「遊糸」の漢語から「遊ぶ糸」、さらに「遊ぶ糸ゆ

ふ」の語が用いられた。古い用例に、『和漢朗詠集』の「霞晴れみど

りの空ものどけてあるかなきかに遊ぶいとゆふ」(四一五)がある。

これを細い糸を引いて空中を浮遊するクモと見る説もある。○たてぬ

き 経緯。機または織物の縦糸と横糸。○難波がた 難波潟。摂津の

国の歌枕。今の大坂湾、特に旧淀川河口辺りの入江。○当 天遊織碧

羅綾 『和漢朗詠集』(春興、一二二)の小野篁の詩句で、「著 野展

敷紅錦繡」に続くもの。「当 天遊織碧羅綾」。空にはかげろうが立

ち、緑のうすぎぬ、綾きぬを織りなすようだ、との意。○心あらん人

にみせばや 「心あらむ人にみせばや津のくにの難波の浦の春のけし

きを」『能因法師集』(八三)、『金葉集』(四三)では第四句「難波わ

たりの」○一かたに 並一通りに。

【考察】左の歌は、霞を、佐保姫が織りなす衣に見立て、佐保姫が

「いとゆふ」を、「糸」の縁で)縦糸横糸にして霞の衣を織り上げた、

と詠んでいる。発想の原形は、あるいは俊成の判詞に挙げる「当 天

遊織碧羅綾」(『和漢朗詠集』二二二、小野篁)の詩句によるかもしれな

いが、「佐保姫」や「糸ゆふ」を詠み入れて工夫した跡が認められる。

右の歌は、霞のなびく場を、春の夜の難波潟とし、その沖をこぐ舟

がかすかに見え隠れする様子を平明に詠む。「見えみ見えみ」と言

いさして終わっているが、こういう語法は、例えば『後拾遺集』の

難波潟浦吹く風に波たてはつのごむ芦の見えみ見えみ(四四、

よみ人しらず)

など、時々用いられたものである。

俊成の判詞は、左の歌については、前記のような表現の巧みに触れて、「をかしく」と評している。しかし右の歌も、能因が「心あらむ人に見せばや」と詠んだ難波の浦の春の情景をよく伝えた佳作である旨を記して、持としている。

十番 左勝

19 神山の梢にかかる夕霞これこそ春の手向なりけれ

右

資隆

20 春霞あめの下にぞみちにける神のめぐみもかくぞ有りける

左歌、山のとほきを梢にかかる夕霞といへる文字つづき、いひしりてこそ見え侍れ。

右歌、神のめぐみもなどいへる心はいうに侍るに、霞やあまりならんとぞ見え侍る。左を勝とす。

【通釈】

十番 左勝

経盛

19 神山のこずえにかかる(白い)夕霞、——これこそ、春が神に供える幣であった。

右

資隆

20 春霞が、天下に広く満ちわたった、——神の恵みも同様なのだ。

左の歌は、山が遠いので「梢にかかる夕霞」と詠んだ言葉の続け様が、表現の仕方を心得たものに思われます。

右の歌は、「神のめぐみも」などと詠んだ心は優れているのですが、霞についての表現(「天の下にぞみちにける」)は、度を超えたところがあるうかと思えます。それで左を勝とします。

【注】○神山 ここでは山城の国の歌枕。今の京都市北区の上賀茂神社の背後の山。○春の手向 春が神に供える幣。「手向」は神への供え物。○いひしりて 歌の詠み様を心得ている様子を言う。

【考察】左の歌は、社の背後の神山の「梢にかかる夕霞」を、「春

が神に供えた幣に見立てた作。

右の歌は、「春霞」が広く立ちこめた様子を「天の下にぞ満ちける」と詠み、その点は「神の恵み」の広く及ぶのも同様とする。

俊成の判詞は、左歌については、神山の霞を神への幣と見立てるにつけて、「梢にかかる夕霞」ととらえた点を「言ひしりて」見えると評価している。

右歌については、下の句の心は評価するが、上の句で霞の広く立ちこめた様子を「あめの下にぞみちにける」とまで言うのは、「あまりならん」、度を超えた表現だろうと批判し、左の勝としている。

十一番 左勝

脩範

21 八重霞さやの中山たちこめてをちこち人や道たどらん

右

顕家

22 かづらきや高まの山の白雲に春はかすみぞ立ちかへてける

左、首尾相叶ひて、こころ詞よろしくこそ侍れ。

右、春はかすみを（群書類従）などいへる姿はをかしく侍るを、たかまの山の峰の雲、春はたたずならん事おぼつかなくぞ。よりて左を勝とすべし。

【通釈】

十一番 左勝

脩範

21 霞が幾重もさやの中山を包むと見えるが、そここの人が道を歩かずにやんでいることであろうか。

右

顕家

22 葛城の、高間の山にかかる白雲に、春は代わって霞が立ったことだ。

左の歌は、前後がよく合って、心も言葉も結構なものと思います。右の歌は、「春は霞ぞ（立ちかへてける）」などと言った詠み様は面白いのですが、高間の山の峰にかかる雲が、春には立たなくなるといふことは、不審に思われるのです。そこで、左を勝としよう。

【注】○さやの中山 遠江の国の歌枕。今の静岡県掛川市の東部にあ

る山。東海道の難所の一つとされた。「さよの中山」とも呼ばれるが、

『古今集』などの歌では「さやの中山」で、平安時代後期以後「さよの中山」と歌われる例が見られる。○をちこち人 遠くや近くの人。あちらこちらの人。○かづらきや高まの山 葛城の高間の山。大和の国の歌枕。葛城山は、今の奈良県と大阪府の境の連山。高間山は、その最高峰の金剛山の別名。

【考察】左右の霞の歌は、ともに歌枕の山を特色に触れて詠み入れている。左の歌は、霞のたちこめた東海道の「さやの中山」では、旅人たちが道を行きなやんでいることであろうと詠む。

右の歌は、白雲のかかる山として知られる葛城の「高間の山」も、春には白雲に代わって霞が立つと詠む。これは『和漢朗詠集』の次の歌によって趣向した作であろう。

者未詳

よそにのみ見てややなむ葛城の高間の山の峰の白雲（四〇九、作

この一首は『俊頼髓脳』にも「けたかく、とほしろき歌」として挙げられて名高く、のち『新古今集』（九九〇）にも収められる。俊成の判詞は、左歌については、首尾がよく適合し、「心言葉よろしく」と評価している。

右歌については、「春は霞ぞ立ちかへてける」あたりの詠み様を「をかし」と評価する一方、これでは「高間の山の峰の雲」が春は立たないことになる、と批判している。優れた古歌のイメージを損なうのを嫌ったものであろう。

十二番 左

積阿

23 そまくだし霞棚引く春くれば雪げの水もこゑあはずなり

右勝

頼政

24 霞をや煙とみらむ武蔵野のつまもこもれるきぎす鳴くなり  
右歌、かのむさし野は今日はなやきそといへる歌を本として、つ

まもこもれる雉鳴くなりといへる心ばへにこそおぼえ侍れ。上の

句も、素性が花とやみらん白雪のといへる歌とおぼえて、いとをかしく侍り。

左は、初にそまくだしとおけるやにはかなる心ちして、いうにしもきこえず。以<sup>レ</sup>右可<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>勝。

【通釈】

十二番 左

積阿

23 川に杣木を流し、霞のたなびく春が来ると、雪解けの水も、それに合わせて声をあげているようだ。

右勝

頼政

24 たなびく霞を、野を焼く煙と見るのだろうか、——武蔵野に、番いで隠れた雉が鳴いている。

右の歌は、あの「武蔵野は今日はな焼きそ（若草のつまもこもれり我もこもれり）」と詠んだ歌を本にして、「つまもこもれる雉鳴くなり」と詠んだ発想と思われます。上の句も、素性の「（春たてば）花とや見らむ白雪の（かかれる枝にうぐひすの鳴く）」と詠んだ歌の心を本にしたと思われて、大層面白く見えます。

左の歌は、最初に「杣くだし」と言ったのが唐突な感じがして、優美には思われない。右の歌を勝とすべきである。

【注】○そまくだし 杣木（材木にするため植林した山の木）をいかに組んで川下へ流すことを言う。○雪げの水 雪が解けた水。○武蔵野のつまもこもれるきぎす 武蔵野に番いで隠れている雉。『伊勢物語』十二段に見える歌、「武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり」によった表現。この歌は『古今集』（一七）に初句「春日野は」の形で見える「よみ人しらず」の古歌を、歌物語に仕立てたらしい。「つま」は本来は男女を問わず配偶者を言ったが、『伊勢物語』では、野に火をつけられようとした時に隠れていた女が詠んだ歌とされ、したがって「つま」は男を指して言ったことになる。しかし左歌の場合は、霞のなびく野に身を潜めて鳴く雉の様子に『伊勢物語』の歌の男女の様子を重ね合わすように趣向したので、雉が雌

雄の番いであることを示す作意は認められるが、「つま」が雌雄のいづれを指すかは問題でなかったと思われる。○素性が花とやみらん白雪のといへる歌 『古今集』に見える素性の歌「春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすのなく」（六）。素性法師は良岑宗貞（僧正遍昭）の子で、俗名玄利、出家して雲林院に住んだ。

【考察】左の歌の初句に「そまくだし」とあるのは、杣木を切り出す作業を冬はやめていたのを、春が来て再開し、川に杣木を流し始めたことを言ったのであろう。そういう霞のたなびく早春を迎えると、折からの雪解けの豊かな水も、それに合わせて声をあげていると聞こえるという、春の賛歌と思われる。ただ作者の俊成（積阿）が判詞に記すとおり、「そまくだし」で始めるのは、いささか唐突に過ぎるかもしれない。

右の歌は、武蔵野に立ちこめた霞を、野を焼く煙と見たのか、番いで隠れていた雉が鳴き立てていると詠む。所を武蔵野とし「つまもこもれる」と言ったのは、これも俊成が判詞に記すとおり、『伊勢物語』十二段の歌、

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれりにより、これを織りこんだ情景に仕立てたと思われる。また「霞をや煙と見らむ」という言い方は、『古今集』の素性の歌、

春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすのなく（六）の見立ての言い様を新しく生かす工夫をしたものとも思われる。

俊成の判詞は、そういう点に触れた上で、右の頼政の歌を「いとをかしく」と評価し、左の自作を「優にしもきこえず」と批判して、右の勝としている。

十三番

左持

静賢

25 神がきのあたりをはらふ春風にたちものかぬは霞なりけり

右

季経

26 さらにぬだにあだにもみえぬ玉がきに重ねてこむるやへ霞かな

左、神がきの春の風そのあたりにはらひ、右の玉がきは霞かさねて宿衛せり。兩首のすがた心おのおのをかしく見ゆ。持とすべし。

【通釈】

十三番 左持

静賢

25 社のあたりを（清めるように）吹き払う春風に対して、立ち去ることを拒むもの、それは霞だった。

右

季経

26 ただでさえ、かりそめには見えぬ玉垣があるのに、重ねて幾重も霞が包み、社を守る様子である。

左の歌は、神垣に吹く春の風がそのあたりを吹き払う様子を詠み、右の歌は、玉垣に霞が重ねて立ちこめて社を守る様子を詠んでいる。この二首の歌の姿、心は、それぞれ面白く思われる。持としよう。

【注】○神がき 神社の周囲の垣。玉垣。また神域、神社についても言う。○あだ 一時的であること。はなかくもろい様子。○宿衛 宿直して護衛すること。

【考察】左右の歌は、神垣または玉垣の辺りの霞を擬人的にとり上げている。左の歌は、神垣の辺りを吹き払う春風に対して、立ちのかないのは霞だったと詠む。右の歌は、立派な玉垣があるのに、霞が重ねて立ちこめて神社を守っていると詠んだものであろう。

俊成の判詞は、そういう二首の表現や内容に関する趣向を認めているようで、「姿心おのおのをかしく見ゆ」と評し、持と判定している。

十四番 左持

範玄

27 神山は霞みにけらし榊葉のかをとめつつや春は行くべき

右

経家

28 いつしかとさほの山辺にかけてけり霞の衣たつとみしまに  
左の歌、かをとめつつやといへる末の句はいうに待るめり。けらしとおけるや、かなひてもきこえざらん。

右歌、さほの山べに霞かくなどいへる心はつねの事なれども、末の句など宜しくみゆ。ただし左の霞、神山にことかかれり。猶持とす。

【通釈】

十四番 左持

範玄

27 神山は霞が立ちこめたようだ、——春は榊の葉の香りを尋ねて行くのがよからうか。

右

経家

28 春を待ち受けて、佐保の山辺に霞の衣を掛けた、——霞が立つと見ていたうちに。

左の歌は「香をとめつつや（春は行くべき）」と詠んだ下の句は、優美なように思います。しかし「けらし」と言ったのは、適切な表現とは思われないでしょう。

右の歌は、佐保の山辺に霞を掛けたなどと詠んだ心は、通常見られることだが、下の句（「霞の衣たつと見し間に」）など、結構に思われる。ただし、左の霞の歌は、神山に言い及んでいる（から負とするわけにはゆかない）。これも持とする。

【注】○神山 十番の「注」参照。○榊葉のかをとめつつ 榊葉の香りを尋ねて。『拾遺集』の神楽歌に「さかき葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞまとみせりける」（五七七）と見える。○いつしかと いつだろうか、早くと。春の訪れを待つ心から言う。○さほの山べ 佐保山は、大和の国の歌枕。平城京の東北、今の奈良市の北方の丘陵。○霞の衣たつ 「霞の衣」は、霞を春の着る衣に見立てたもの。『古今集』に、「春の着る霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ乱るべらなれ」（二三、在原行平）の歌がある。「たつ」は霞が立つ意だが、「衣」に關して「裁つ」意でつながる。

【考察】左右の歌は、ともに歌枕の山の霞む様子を歌うが、左の歌は、「神山」が霞に包まれて道も見えないが、「榊葉の香をとめつつ」春は行くべきだろうかと、と詠む。「神山」と榊との関係は、『後拾遺集』の

曾禰好忠の歌にも「榊とる卯月うづきになれば神山の」(一六九)などと詠  
まれているが、ここでは神楽歌の、

榊葉の香をかぐはしみとめくれば八十やそ氏人ぞまとゐせりける  
〔古今集〕五七七)

の言葉をとりに入れ、霞で道も見えない神山は榊葉の香りを頼りにし  
て行くべきだろうか、と趣向したものであろう。

右の歌は、「佐保山」が春の東から来る道筋に当たると見て、そこ  
に春を待ち受け、春の着る霞の衣を裁って掛けたとの趣旨であろう。

「佐保」は「榊」の心ももつか。これも趣向を工夫した作である。

俊成の判詞は、左歌については、下の句を「優」と評価するが、第  
三句「霞みにけらし」の「けらし」を適切な言い方でないと批判して  
いる。これは「けらし」の示す推量の心はこの場合不要で、眼前の実  
景とした方がよいという指摘であろうか。ただ清輔の『和歌初学抄』  
には「けらし」を、「ケリ也」と注しており、「けらし」と「けり」を  
同様の意とする見方があったらしいので、この左歌も「けり」の心で  
「けらし」と和らげて言ったとも思われる。しかし俊成は伝統的な語  
法を重んじる立場から問題視したのであろう。

右歌については、まず「佐保の山べに霞かくなどいへる心は常の事」  
と、着想の目新しくない点を指摘しているが、これは例えば、

佐保山に霞のころもかけてけり何をかよもの空はきるらん〔散  
木奇歌集〕八)

のような先例のある点を言ったと思われる。しかし下句の表現は「宜  
しく見ゆ」と評価している。これは、霞が立つのに「霞の衣裁つ」を  
掛けた技巧を認めたのであろう。

## 十五番 左

29 朝まだき賀茂の河せを見渡せば霞の底にうづもれにけり

右勝

頼 輔  
道 因

30 行末を立ちのく今朝の霞こそ中道のしるべなりけれ

左歌「左歌」よろしくきこえ侍り。霞にうづもるなどよむ事  
を、（群書類從）いづこもおなじ事にはあれど、賀茂の河瀬などはさは見え  
しもや侍らん。

右、旅行く霞立ちのく様にみゆらん、さる事なり。心ありてきこ  
ゆ。すこしはまさり侍るにや。

## 【通釈】

十五番 左

29 朝早く、賀茂の川瀬を見渡すと、霞の底に埋もれてしまっていた。

右勝

頼 輔  
道 因

30 行けば行く先を空ける、今朝の霞、それは（道の妨げどころか）、  
むしろ道しるべであった。

左の歌は「左歌」結構に思われます。しかし、霞にうづもれる  
などと詠むことは、どこでも同じことが言えるわけだが、賀茂の  
川瀬などは、特にそれにふさわしいとは思えないのでは、と思  
います。

右の歌で、旅をして行く時、霞が（進むにつれて）立ちのくよう  
に見えるというのは、うなずかれることである。その点、思い入  
れて詠んでいると思われる。多少は右がまさっているでしょうか。

【注】○賀茂の河せ 「賀茂」は、山城の国の歌枕、今の京都市北区  
上賀茂と左京区下鴨の辺り。賀茂川は上賀茂から下鴨へ流れ、高野川  
と合流し、桂川に注ぐ。「河せ」は、川の底が浅く、流れの速いこと  
ろ。

【考察】左の歌は、早朝に賀茂の川瀬を見渡すと、「霞の底にうづも  
れ」ていたと詠む。寸描風の作であらう。

右の歌は、行く手に立ちこめた朝霞が、進むままに立ちのくかと思  
え、道の妨げどころか「道のしるべ」と思われたと詠む。新しく気付  
いたことを詠みとめた趣の作である。

俊成の判詞は、左歌については、本文に一部空白があるが、「よろ  
しく」と評価したと見える一方、霞に埋もれるという発想が、「賀茂

の河瀬」を対象として生かされるかどうかという点を問題視している。右歌については、道の行く手の霞が「立ちのく」ように見えると詠んだ点を、「さる事なり」と肯定し、「心あり」、よく思い入れていると評価して、左歌よりも「すこしはまさり侍るにや」と判定している。

十六番 左持

隆房

31 神山の霞はいくへへだつともあけの玉がきなやはかくるる  
右 親宗

32 わぎも子が袖ふる山もみえぬかな霞の衣立ちしこむれば

左歌、霞はいくへなどいへる姿、いとをかしくこそ侍るめれ。なやはかくるることばや、いかがはときこゆらん。(群書類従)

右歌、袖ふる山もなどいへる心すがた、いひしりてみえ侍り。但、社頭の歌、猶持とすべし。

【通釈】

十六番 左持

隆房

31 神山に、霞はどれほど重なり、人目を遮っても、朱の玉垣をめぐらす社の、名は隠れもないのだ。

右

親宗

32 いとしい人が袖を振る、袖振山も見えない、——霞が一面に立ちこめているので。

左の歌は、「霞は幾重（へだつとも）」などと詠んだ姿が、大層面白く思われます。ただ「名やは隠るる」という言葉は、どうかと思われる言葉でしょう。

右の歌は、「袖振る山も（見えぬかな）」などと詠んだ心や姿が、歌の詠み様を心得たものと見えます。ただし、左の社頭の様子を詠んだ歌は、（神に関する歌で、）負にするわけにゆかないから、やはり持としよう。

【注】○神山 十番の「注」参照。○あけの玉がき 朱塗りの玉垣。

○わぎもこ 我妹子。「我が妹」の約言「我妹」に、親愛の心を示す

接尾語「こ」のついた形。男性から、特に親しい女性を呼ぶ言葉。ここでは「わぎもこが」を「袖振山」に続けて枕詞のように用いた。○袖ふる山 大和の国の歌枕。今の天理市の布留山か。○霞の衣 十四番の「注」参照。ここでは前の「袖ふる山」、後の「立ち」（裁ち）と縁語になる。

【考察】左の歌は、神山を霞がどれほど深く隠しても、朱の玉垣の社は隠れもないとの心であろう。

右の歌は、霞が立ちこめて袖振山も見えないことを、「わぎも子が」という言葉から「袖振山」の名を引き出し、「袖」「衣」「立ち」（裁ち）と縁語を用いて詠んでいる。ただ、こういう表現の工夫は先例があり、

わぎもこが袖振山も春きてぞ霞の衣たちわたりける（『堀河百首』三四、『千載集』九、大江匡房）

と詠まれている。

俊成の判詞は、左の歌については、「霞は幾重」などと詠んだ点を、「いとをかしく」と評価している。しかし「名やは隠るる」という言葉は疑問視している。

右の歌については、「袖ふる山も」などと詠んだ心姿が、「言ひしりて」見えると評価している。これは「袖ふる山」を中心に前記のような巧みな表現が見える点を、歌の詠み様を心得ていると評したかと思われる。

十七番 左

有房

33 みわたせば明石もすまもかすみしていづれなるらんおのがうらうら  
右勝 経正

34 吉野山消えあへぬ雪をこめつれば霞ぞ冬のへだてなりける

左、あかしもすまもとおきて、おのがうらうらといへる心、をかしくは侍るに、かすみしてといへることば、ふるくもよめらむをえ見及び侍らぬ。時雨して、夕立して、雪してなどは聞きなれても侍らぬ、いかが。

右、霞のへだてなる心は、つねなる事なれど、心ありてもみゆ。  
左（群書類従） 左右たがひに申すところあり。仍右のかちとす。

【通釈】

十七番 左

右房

33 見渡すと、明石も須磨も霞がかかって、それぞれの浦ほどの辺りだろうか、定かでない。

右勝

経正

34 吉野山の、消え残る雪を（霞が）包んだので、霞こそ冬を（春から）隔てるものと知った。

左の歌は、「明石も須磨も」と言った上で、「おのが浦々」と詠んだ心が、面白いとは思うのですが、「かすみして」と言った言葉は、昔から歌に用いた例を見たことがありません。「時雨して」、「夕立して」、「雪して」などの言葉は、耳になじんでいないと思うのですが、いかがでしょう。

右の歌の、霞が隔てであるという着想は、特に目新しいものではないけれども、思い入れて詠んでいるようにも見える。（このことについては）左右の歌人も互いに意見を述べるところがあった。そういう次第で、右の勝とする。

【注】○明石もすまも 「明石」は、播磨の国の歌枕で、今の兵庫県明石市の海岸の辺り。「須磨」は、摂津の国の歌枕で、今の神戸市須磨区の海岸の辺り。「源氏物語」須磨の巻に「明石の浦は、ただはひ渡るほどなれば」とあるように、須磨と明石は近い距離にあった。

「明石も須磨も」と並べて言うことは、「考察」の項に引く『拾遺集』の古歌に見える。○おのがうらうら それぞれの浦。「考察」に引く古歌参照。○吉野山 大和の国の歌枕。今の奈良県吉野郡一帯の山。

【考察】左の歌は、見渡すと「明石も須磨も」霞が立ちこめて、「おのが浦々」ほどの辺りか定かでないという風景を詠む。この一首は用いられた言葉から見て、人麻呂の作とされた次の古歌によって詠まれたと思われる。

白波はたてど衣に重ならず明石も須磨もおのがうらうら（『人丸集』二一五、『拾遺集』四七七）

しかし古歌が海辺のことと衣服のことを、「立てど」と「裁てど」、「浦」と「裏」などの掛詞を用いて関連させ、言葉の技巧に重きを置いた作であるのに比べて、左歌は古歌の言葉をとり入れてはいるが、霞の風景を平明に詠んでいる。

右の歌は、吉野山で冬のなごりの雪を霞が包んでいることから、霞が冬を隔てるものと知ったと詠む。そういう霞のとらえ方に特色を示した作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、古歌の言葉を生かして用いた心を「をかしく」と評価しているようである。しかし「かすみして」という言い方は古くから見られないと批判する。そして同様の耳慣れない言い方の例に「時雨して」「夕立して」「雪して」を挙げている。この批判の趣旨は妥当と思われるが、「時雨して」は『散木奇歌集』（五七七）などに用例がある。

右の歌については、着想が「つねなる」こと、特に目新しくないこととしながら、「心ありても見ゆ」、思い入れて詠んだとも見えると評している。そして、判詞の最後の部分は文章が簡単で具体的に分かりかねる点もあるが、右の勝とする。

十八番 左持

忠度

35 朝霞ふかくしたてばその原やいづらよそにもみえしははきぎ

右

寂蓮

36 吉野山雪にはのこる滝つせも春は霞にうづもれにけり  
左歌、そのはら霞によせて、いづらよそにもなどいへる所をかしく持り。

右歌、詞にめづらしき事は侍らねど、上下あひ叶ひてうた姿よろしく侍るなるべし。但、左は本体（本歌）あるやうなり。持とすべし。

【通釈】

十八番 左持

忠度

35 朝霞が深くかかると、園原そのはらの、遠くに見えたははきき帚木も、どこにあるのか見当たらない。

右

寂蓮

36 吉野山の、雪には埋もれず残った早瀬も、春は霞に包まれて埋もれてしまった。

左の歌は、園原（の帚木）を霞に寄せて、「いづらよそにも（見えし帚木）」などと詠んだところが面白いと思われます。

右の歌は、言葉の上で目新しいところはありますが、上の句と下の句がよく照応して、歌の姿が結構な作でしょう。ただし、対する左の歌は本歌（本歌）本文ニヨルによった歌の姿である。持しようと思う。

【注】○その原 園原。信濃の国の歌枕。今の長野県下伊那郡阿智村の辺りと言われる。帚木（遠望すると帚のような形のこずえが見えるが、近づくと消えうせるという伝承の木）のある所として知られる。

○いづら どこ。所在を問うのに用いられる語。○よそにもみえしははきき 「よそに」は、遠く離れての意。「帚木」は「園原」の「注」

で触れたが、特に坂上是則の歌「園原やふせ屋におふる帚木のありとてゆけどあはぬ君かな」（『左兵衛佐定文歌合』二八、『古今和歌六帖』三〇一九、『新古今集』九九七では第四句「ありとは見えて」）によって有名。『俊頼髓脳』（二八六）では第四句「ありとは見れど」の形であるが、この歌に関して次のように記している。「信濃の国に園原ふせやといへる所あるに、そこに森あるを、よそにて見れば庭はくははきき帚木に似たる木の梢の見ゆるが、近くよりて見ればうせて皆ときは木にてなむ見ゆると言ひ伝へたるを、このごろ見たる人に問へば、さる木も見えずとぞ申す。昔こそはさやうにありけめ。」○吉野山 十七番の

「注」参照。○滝つせ 「たぎつ瀬」とも、水の激しく流れる早瀬 ○本体 「本体」の本文が正しければ、例えば「優なる歌の本体と見ゆ」（『後鳥羽院御口伝』）の場合のように、根本の姿といった意に解することになるが、この判詞の場合、そう見るのは少々無理ではないか

と思われる。群書類従本、歌合部類本などに「本歌」とあるのに一応従って「通釈」を記した。

【考察】左の歌は、「注」で触れたように、園原の帚木の伝誦を詠んだ古歌を背景にした霞の歌である。霞が深く立ちこめると遠望された帚木も見えない、と詠んだものであろう。

なお、「よそにもみえし」という従来を読み様に従って「通釈」を記したが、「よそにもみえじ」として解することも可能ではないかと思うが、いかがであろう。

右の歌は、吉野山で、雪には埋もれなかった滝つ瀬が、春は霞に埋もれたと詠んでいる。俊成が判詞に評するとおり、上下の句が照応する整った形で、平明に詠まれている。

俊成の判詞は、左歌については、園原の帚木の伝誦を霞に結びつけて詠んだ点を評価したようで、「をかしく」と言っている。

右歌については、目新しい言葉はないが、上下の句が照応した歌の姿と認め、「よろしく」と評価する。そして最後に左歌の姿のことも触れた上で、持としている。

十九番 左持

盛方

37 須磨のおき霞の衣立ちぬればいづれかうらとみえまがひぬる

右

顕昭

38 朝霞きえ行くままに高砂の松のみどりのふかくなるかな

左のすまのおきのかすみ、いづれか浦などいへる心すがたをかしくこそ待るめれ。はての句、いささか心のゆかぬ様にや待るべからん。

右の歌、はじめつかに侍りつる歌に、いささかの詞共のかはれるなるべし。是は消行くままにといへるが、いかにぞきこゆるにやあらむ。左右いうに侍るべし。又持とす。

【通釈】

十九番 左持

盛方

37 須磨の沖に霞が立ったので、どちらが浦かと、分ち難く見えた。  
右 顯昭

38 朝霞が消えてゆくにつれて、高砂たかさぎの松の緑の色が濃く見えてくる。

左の歌の、須磨の沖の霞につけて、「いづれか浦」などと詠んだ心や姿は、面白いように思います。しかし歌の終わりの句（「見えまがひぬる」）は、いささか不満の残る詠み様であろうかと思えます。

右の歌は、初めの方（二番右）にありました歌と、わずかに幾つかの言葉が違って作でしょう。霞について（二番右の歌は「分け行くままに」と詠んでいたのに対して）、この歌は「消えゆくままに」と詠んでいるのが、どうかと思われる点でしょうか。しかし左右ともに優美な作でしょう。これも持とする。

【注】○須磨 十七番の「注」参照。○霞の衣立ちぬれば 十四番の「注」参照。ここでは「立ち」は「衣」との関係で「裁ち」の意をもつ外、後の「浦」と同音の「裏」に続き縁語関係を作る。○高砂 播磨の国の歌枕。今の兵庫県高砂市・加古川市辺りの、加古川河口付近の地。松を主な景物とする。

【考察】左の歌は、須磨の沖に霞が立ちこめたので、「いづれか浦」、どちらが浦かと区別が付き難く見えたと言む。表現上の工夫として、「霞の衣」の語を用いることから「霞―立ち―浦」に「衣―裁ち―裏」を掛け、縁語仕立てにしている。

右の歌は、朝霞が消えゆくにつれて、高砂の松の緑の色濃く見えると詠む。平明な叙景歌と見られるが、俊成が判詞に言うとおり、二番右の歌、

春霞分け行くままに尾おの上へなる松のみどりぞ色まさりぬるとよく似た歌である。

俊成の判詞は、左歌については、「心姿をかしく」と評価する。しかし第五句「見えまがひぬる」は、「いささか心ゆかぬ」詠み様であろうと言う。「見えまがふ」という語は『後撰集』のよみ人しらずの

歌（一一七）などに用例はあるが、「見えまがふ」に比べても歌語としてやや締まりを欠くようである。そういう点を俊成は指摘したのであらう。

右歌については、朝霞が「消えゆくままに」と詠んだのを問題点として挙げている。これは題の霞が生かされていない点が、まず問題であったであろうと思う。しかし最後に左右の歌がいずれも「優」であると言ひ、持としている。

二十番 左持

39 山たかみ霞の中なかにきてみれば出でし都を又こめてけり

右

仲綱

40 山姫やさらすかひなく思ふらん霞にこもる布引の滝

左、いでし都を又こめてけりなどいへる心すがたよく侍るめり。

右歌、姿いとをかしくは侍るを、霞にこもるといへるや、布引の滝すこしほいなく侍らん。持とすべし。

【通釈】

二十番 左持

隆信

39 山が高いので、霞の中に来て見ると、後にした都を、また霞が包んでいた。

右

仲綱

40 山姫も、さらすかひがないと思うことだろうか、――（布を張ってさらす）布引ぬひひきの滝が、霞に包まれると。

左の歌は、「出でし都を又こめてけり」と詠んでいる心と姿がよいように思われます。

右の歌は、姿が大層面白いとは思いますが、「霞にこもる（布引の滝）」と詠んでいるのが、布引の滝にとって少々残念なことでしょう。持としよう。

【注】○山姫 山の女神。○布引の滝 摂津の国の歌枕。今の神戸市中央区、生田川上流の滝。「布引」は、布をさらすため広げて張ること。

【考察】左の歌は、高い山の霞の中に来て見ると、「出でし都」をまた霞が包んでいたと詠む。都との隔てとなるものとして霞をとり上げたもので、後にした都を思う感傷の心に霞はふさわしいようである。

右の歌は、「布引の滝」が霞に包まれて、布をさらす山姫もかいなく思うことだろうと詠む。滝を布に見立て、その布をさらす山姫を出す趣向は、伊勢が竜門の滝について詠んだ歌、

たちぬはぬ衣きぬきし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ（『伊勢集』七、『古今集』九二六）

に見られるが、この右歌では「布引の滝」の霞の歌という着想の中にとり入れている。

俊成の判詞は、左の歌については、下句を挙げて「心すがたよく」と評している。

右の歌については、「姿いとをかしく」と評価しているが、「霞にももる」と詠むと「布引の滝」が「少し本意なく」思われるとも記している。「布引の滝」という歌枕に視点を置けば、その特色が表に出ずに終わっている点を、いささか不本意だと言ひ添えたのであろう。

二十一番 左持

41 み舟山みふねそことも見えぬ霞にて落ちくる滝の音のみぞする

右 公時 定家

42 神山の春の霞やひとしらにあはれをかくるしなるらん

左歌、おちくる滝のなどいへるすがた、いとをかしくこそ待るめれ。みふね山、いづこにても侍りぬべからん。

右歌、神山の霞もあはれをかくるしるしにやといへる心、よしなきにあらず。但左なにとなく歌しなをかしくみえ侍り。右歌又神やまにことよれり。なほ持とす。

【通釈】

二十一番 左持

41 三船山は、どことも見えぬ深い霞の中で、ただ落ちかかる滝の音だ

公時

けが響く。

右

定家

42 神山にかかる春の霞、これは人知れず（私を）ふびんに思ってくださる、神の靈験であろうか。

左の歌は、「落ちくる滝の（音のみぞする）」などと詠んだ詠み様が、大層面白いように思われます。ただ「三船山」は、（そこに限らず）どこでもよさそうな気がします。

右の歌で、神山の霞も神が「あはれをかくるしるし」であろうかと詠んだ心は、無意味だというわけではない。ただし、左の歌は何となく歌の風格に心を引くものと見受けられます。一方、右の歌も神山に関して詠んでいる（ので負けにはできない）。やはり持とする。

【注】○み舟山 三船山。「みふねの山」として歌に詠まれることが多い。大和の国の歌枕。今の奈良県吉野郡吉野町、宮滝の南にある山。○神山 十番の「注」参照。○ひとしらに 人知らに。「に」は打消の助動詞「ず」の古い連用形で、「人知らず」と同意。○歌しな 歌の風格。

【考察】左の歌は、三船の山が一面に深い霞に包まれた中に、滝の音のみが響く様子を詠む。三船の山は「注」で触れたように宮滝に近く、『万葉集』にも「滝の上の三船の山」（九四九、一七三七）と詠まれ、その伝統は平安時代以後も受けつがれている。ここでは三船山の霞の歌として、滝の音を前面に出して詠んだ点が特長になっていると思う。

右の歌は、神山にかかる霞を、自分に対して人知れず「あはれをかくる」賀茂の神の靈験と見る心を詠む。定家の歌として、この歌合の他の二首とともに最も早い時期のものに属する。定家らしい特長は認め難いが、十七歳の時の作なので当然なのかもしれない。

俊成の判詞は、左歌については、「落ちくる滝の（音のみぞする）」などと詠んだ姿を「いとをかしく」と評価する。ただ「三船山」は「いづこにても侍りぬべからん」と言ひ添えている。これは「三船山」

でなく他の場所でもよいという意味に受けとられるように思うが、前述のとおり「三船山」と「滝」の関係をとりあげてきた歌の伝統があることから見て、この俊成の見解は不審に思われる。

右歌については、その心は「よしなきにあらざ」と一応弁護している。そして対する左歌が何となく「歌品をかしく」見えることを認めたと上で、右歌が「神山」に関する作で負けにできない旨を言い、持している。

二十二番 左持

定宗

43 いっしかと焼きてし野辺の霞をば又思ひたつけふりとぞみる

右

伊綱

44 葛城やくめちの橋のゆふ霞はるはいづくかとだえなるらん

左の歌、心すがたをかきやうにはんべるを、又おもひたつけふり、さらでもやきこゆ。  
(群書類従)

右歌、かつらきやまといへる、うためきて待るを、くめちのはしは、わたさむとはじめばかりにて、とだえにやおよびけん。ゆふがすみわきてははるはおしなべてもいかが。(群書類従) 左右おなじほどの事なるべし。

【通釈】

二十二番 左持

定宗

43 春よ早くと願って焼いた野辺に、立ちこめた霞を、また思い立って野を焼く煙かとするのです。

右

伊綱

44 葛城の久米路の橋を、夕霞が包んでいて、春は、どこが橋の切れ目なのだろうか、見分けがつかない。

左の歌は、心や姿が面白いようですが、「また思ひ立つ煙」とあるのは、そう言わない方がよいのではと思われる。

右の歌で、「葛城や」と詠んでのは、歌らしく見えますけれど、「久米路の橋」は、(一言主神らが) 架け渡そうとして始めた

ばかりにて(本文ニヨル) ばかりで、中止に至ったという橋であろう。また「夕霞」は、

(「夕」の霞と) 特に限定して言った言葉であるのに、すべて一樣に(春は霞で見分けがつかないと) 詠んだのも、いかななものか。

この左右の歌は同等の作と見るべきであろう。

【注】○いっしかと いっのことか、早くと。ここでは春の来るのを待ち望む気持ちで言う。○焼きてし野辺 春が来る前に、新しい草がよく育つように野の枯れ草を焼いたことを言う。○葛城やくめちの橋「葛城」については十一番の「注」参照。役行者が一言主神らに命じ、葛城山から吉野の金峰山へ橋を架けようとしたが、神が自分の醜いことを恥じて夜だけしか働かず、結局未完成に終わったという伝説に出てくる橋。この伝説は『三宝絵』(中巻二)、『今昔物語集』(巻十一第三)等に見える。

【考察】左の歌は、野辺にたなびく霞が、野焼きの煙と見まがうことを作意の眼目としたものであろう。

右の歌は、「葛城」の「久米路の橋」を夕霞が包んで、どこが「とだえ」か見分けがたいと詠む。「注」で触れたような伝説に出てくるこの橋は、例えば、

葛城やくめちの橋にあらばこそ思ふ心を中ぞらにせめ(『後撰集』七七四、よみ人しらす)

など、恋の歌を主として数多く詠まれている。ただ後になると、この橋を實在の橋のように叙景的に詠む歌も見られるようになる。『堀河百首』の、

葛城や渡しもはてぬものゆゑに久米の岩橋若生ひにけり(一三三二、源師頼。『千載集』一〇四二)

などは、その早い例であろう。この右歌も、その系統に属すると見られる。

俊成の判詞は、左の歌については、「心姿をかきやう」と評する一方、下句の「又思ひ立つ煙」を「さらでもや」と記している。野焼きを「又思ひ立つ」というのは、作がが目立ちすぎると見て批判した

のであろうか。

右の歌について記された判詞のうち、傍注を付した三箇所の記事は、この形でよいかどうか疑問のある部分、もしくは文意が通じ難い部分である。これらの部分については、傍注に挙げたとおり『群書類従』に少し違った形の記述が見られ、それによれば問題は一応解消するかと思われる。それで、『群書類従』の本文は校訂者が加筆した可能性も否定できないけれども、ここでは当面その記述によって見ておくことにする。

その判詞によれば、俊成は右歌については、「葛城や久米路の橋」と詠んだ伝統的な表現を、「歌めきて」見えると評する一方、問題点をとり上げて批判しているようである。ただその初めの部分は、伝説の「久米路の橋」が架け始めたばかりで中止に至ったことを言っているに過ぎないとも見えるが、これは橋の切れ目が存在するのを霞が隠したように詠んでいる点を不相当と見て批判したとも思われる。また夕べの霞の景をとり上げて春一般の現象として詠んだ点を問題にしているようである。

二十三番 左

45 朝霞かすみの中の梅が枝に鶯きゐるはるの山里

右勝

公衡

46 朝まだきたるみの澳を見わたせば霞みぞわたる淡路島山

左歌、すがた心よろしくははるなるべし(群書類従)。ただし、うぐいす、梅が枝などにわたれるにや、歌合にはいかか。(空白ナシ)はれのうたは人に見せあはすべく侍る事なり。  
右歌、この澳の名ぞすこしさらずともやとみえはんべれど、あはち島の霞、眺望のころいとをかしく、霞の歌はかやうにこそみえはんべれば、右の勝にこそ。

【通釈】

二十三番 左

成家

『別雷社歌合』注釈(一)

45 朝霞のかすむ中を、梅の枝に、うぐいすが来ている(らしく声が響く)、——春の山里は。

右勝

公衡

46 朝早く、垂水の沖を見渡すと、淡路島の山影が一面にかすんでいた。左の歌は、姿、心が結構な作でしょう。ただし、うぐいすが梅の枝に来ていと詠んでいるようだが、歌合の歌としてはいかかがであらう。「」(歌合などの)晴れの場に出す歌は、その前に人に見せて意見を聞くのがよいのです。

右の歌は、この垂水の沖という地名が少々気になって、それ以外の地名でもよいかとも思われますが、淡路島の霞を詠んだのは、眺望の心が大層面白く、霞の歌はこのように詠むべきものと見えますので、右の勝ということになります。

【注】○たるみ 今の神戸市垂水区の海岸付近の地。須磨と明石の間に位置し、明石海峡を隔てて淡路島に対する。『能因歌枕』には播磨の国の歌枕として挙げているが、歌に詠まれた例は多くはない。○淡路島山 今の兵庫県南部の淡路島。海上に山影が見えることから、「島山」ところでは言ったのであろう。歌枕。○はれのうた 公の場で詠む歌。日常生活の私的な場で詠む歌(けの歌)に対して言う。

【考察】左の歌は、春の山里で、朝霞の中、梅の枝にうぐいすが来ているらしく声がすることを詠む。

右の歌は、朝早く垂水の沖を見渡すと、淡路島が一面にかすんでいたと詠む。左右ともに平明な詠み様である。

俊成の判詞は、左歌については、「姿心よろしく」と評価する一方、「梅が枝にうぐいす来ある」と詠んだことに関して、「歌合にはいかか」と問題視し、晴の歌は事前に人に見せて意見を聞くことが望ましいと言っている。俊成は歌合の歌については、すでに『広田社歌合』の判詞の中で、

歌合のときは姿を先とし、難を除く事なれば(海上眺望十二番)と記しているが、この左歌の場合、姿は「よろしく」と評価している

ので、なお外に「難」(欠点)があると見たものと思われる。では、「梅が枝にうぐひす来る」と詠んだことに、どんな欠点を俊成は認めたのであろうか。

これは「梅が枝」「うぐいす」の二語の語頭の「う」の重複が歌病の文字病に当たると見たものかと思う。もしその外に考えるとすれば、『古今集』に次の歌があることであらうか。

梅が枝に来るうぐひす春かけて鳴けどもいまだ雪はふりつつ  
(五、よみ人しらず)

この『古今集』の歌は古来有名で、それだけにその一・二句を単純に(本歌を生かす配慮もせず)とり入れることは問題があり、特に歌合の歌の場合は注意して避けるべきだと、俊成は見てもしれない。

右歌については、「垂水」の沖とした点は少し不満のようであるが、淡路島の霞を詠んだ眺望の心を「いとをかしく」と高く評価し、右の勝としている。

二十四番 左持

47 明暮のそらかと思へば朝日さす山路もみえず霞むなりけり  
右 季 広 備 前

48 春霞たてば煙もまがひつづいづれかふじの高ねなるらん  
左右の霞、左左は空を賞し、右は高名なり(群書類従)賞し、右は高高なり。いづれもすこしあまりにや  
あらん。尤持とす。

【通釈】

二十四番 左持

47 夜明け前のほの暗い空かと思っていると、朝日のさす山路も見えず、霞がかかっているのだった。

右

備 前

48 春霞が立つと、(富士の)煙もそれとまじり合って、どこが富士の高ねであらうか、見分けがつかない。

左右の霞の歌は、左は「〃」、右は「〃」。いずれも少々

度を超えた詠み様だろと思う。当然、持とする。

【注】○明暮 明暮あひぐれ(夜明け前の薄暗い時分)のことであらう。○左賞し、右は高高なり この欠字を含む部分は、群書類従本の形を本文に添えたが、北岡文庫蔵幽齋本を底本とした『平安朝歌合大成』では、「左写賞し、右は高広なり」とする。いずれも意味が明らかでない。○尤 もっとも。当然の意。

【考察】左右の歌は、ともに霞が深くて視野が限られることを詠んでいるが、左の歌は、夜明け前で暗いと思ったが、朝日のさす山路も見えぬほど霞が深かったのだと詠む。また右の歌は、深い霞が富士の煙とまじり合って、富士の高ねの所在も定かでないこと詠んでいる。

俊成の判詞は、「注」に触れたように本文の一部が解し難い形で伝わるが、左右ともに「すこしあまりにやあらん」と言い、持とする。左右ともに霞の深さの表現に少々並外れたところがあると評したものであろう。

二十五番 左持

49 うとからぬいもせの山の中はただかすみばかりぞへだてなりける  
右 兼 綱 智 将

50 しのぢやみさかをのぼる旅人は霞をこゆる心ちこそすれ

左歌、いもせの山のかすみは、をかしといひつべし。ただといへることばは、うちまかせぬやうなれど、この歌にとりては、あしくもきこえず。へだてなりけるなどやいかが。

右のたび人は面影ありて優にみゆるを、かすみをこゆるといへる心は、さかしきやうなるから物から(唐)物に具せむ 平安朝歌合大成にくせむ心ちやすらん。ただし左も俗にちかき心あり。猶持とすべし。

【通釈】

二十五番 左持

49 浅からぬ縁の妹山と背山、その中はただ、霞ばかりが隔てるものだった。

兼 綱

50 信濃路の、御坂を登る旅人は、霞を越えて行くと思われるのだった。左の歌に詠まれた妹背の山の霞は、面白いと言えるであろう。

「ただ」と言った言葉は、やや普通でない感じがするが、この歌に關しては、わるいとは思われない。「隔てなりける」などの言葉の方が、いかがであろうと思う。

右の歌に詠まれた旅人は、その様子が思い浮かべられて優美に見えるが、「霞を越ゆる」と詠んだ心は、気のきいた漢詩文などに類するもののように感じられるところがあるか。ただし左の歌も俗に近い心がある。それで、やはり持とする。

【注】○いもせの山 妹山と背山。紀伊の国の歌枕。今の和歌山県伊都郡かつらぎ町を流れる紀ノ川を隔てて対する二つの山。男女の仲になぞらえて詠まれるのが一般である。○しなのぢやみさか 信濃路の御坂。「信濃路」は、信濃の国へ通じる道、木曾路。「御坂」は、今の岐阜県中津川市と長野県下伊那郡との境にある神坂峠。○面影ありてイメージが（ほのかに）思い浮かべられて。○さかしきやうなるから物にくせむ心ちやすらん この部分は『新編国歌大観』では、「からの後に読点を付してあるが、意味が通じ難いので、読点のない形にもどして挙げた。『新校群書類従』も、「から」の後に読点を付するが、「物にくせむ」とする。『平安朝歌合大成』では、「さかしきやうなる唐物に具せむ心ちやすらむ」と漢字を当てて。難解な部分であるが、「通釈」では試みに「唐物」の主な内容に漢詩文をあててみた。ただ「具せむ」とすれば、「具す」は、どう解すべきなのか。あるいは「くせむ」という動詞で、偏った風になる意であろうか。それとも「くみせむ」の「み」の脱であろうか。

【考察】左右の歌は、ともに山の霞をとり上げているが、左の歌は、妹背の山を隔てるのは霞ばかりと詠む。これは語句が似ている点で、次の『後撰集』の歌の影響があるかもしれない。

むつましき妹背の山の中にさへ隔つる雲の晴れずもあるかな（一

二一四、よみ人しらす）

右の歌は、信濃路の御坂を登る旅人は、霞を越えると思われたと詠む。この信濃路の御坂を詠んだ歌は多くはないが、

白雲の上より見ゆるあしひきの山の高ねやみさかななるらん（『能因法師集』八九、『後拾遺集』五一四）

の一首が「信濃のみさか」をとり上げていることは詞書で明らかなので、高い山地として都の人々にも知られていたようである。

俊成の判詞は、左の歌については、「をかし」と評価する一方、部分的には「隔てなりける」という表現を問題視している。その理由は記していないが、俊成の師の基俊に「題の心深からざれば」と歌を批判した例がある（元永元年十月二日『内大臣家歌合』残菊五番判詞）。それに通じる立場で、この場合題の霞を、妹背の山の隔てとしてのみ詠んだのは、題への思いが不足していると批判したものであろうか。

右の歌については、「面影ありて優に見ゆる」と評価する一方、「霞を越ゆる」と詠んだ心を問題視しているようである。この部分の判詞は読みとるのが難しく、どういう点で問題視されたのか定かでない。それで「注」に記したように、仮に試案として、「霞を越ゆる」と詠むような着想は漢詩文的なもので、和歌の伝統的な着想の域を超える」と俊成は見たと考えたが、推測の範囲を出ない。

なお、判詞は最後に再び左歌に言及して、「俗に近き心」があると言い、持としている。

## 二十六番

左勝

敦 伸

51 山の端に一むらかかるうす雲はたなびき初むる霞なりけり

右

勝 命

52 いづくとも立ちくる春を知らぬかな大かた空のかすみわたれば

左歌、一村かかろうす雲と見ゆらん、よろしくきこゆ。  
右歌、おほかた空などいへる心も、をかしく侍れど、左の霞いますこしたちまされるにや。

【通釈】

二十六番 左勝

敦仲

51 遠く山の稜線の辺りにかかる一群の薄雲、と見たのは、なびき始めた霞だった。

右

勝命

52 いずれとも、春の立って来る所は知れない、—— 広く一面に空が霞んで見えるので。

左の歌は、霞が「一むらかかる薄雲」と見える情景を詠んだのであろうが、結構に思われる。

右の歌で、「おほかた空（のかすみわたれば）」などと詠んだ心も、面白く思われますが、左の霞の歌が今少し優れているであろうか。

【注】○山の端 山の稜線。○大かた おしなべて。全般的に。

【考察】左の歌は、山の端にかかる一群の薄雲と見たのは、霞であったと詠む。右の歌は、春の訪れる所は定かでない、一帯に空がかすんでいるので、と詠む。左右ともに、春の来る先ぶれとして霞をとらえ、平明に詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌に対しては「よろしく」、右歌に対しては「をかしく」と評価するが、比較すれば左歌の方が「今少したちまされるにや」と評している。左歌の方が理をはさまず、句切れのないのびやかな声調で詠まれている点を認めたものであろうか。

二十七番 左持

広言

53 神山は霞みにけらし今朝みればいづらみどりの松の村立

祐盛

54 はるがすみ八重の塩路にたなびけばそこもみえず澳津島山

左歌、をかしくも侍るを、けらしといへることばや、す糸の句のいづらみどりのなどいへる姿は、不相似侍らん。

右歌、そこもみえずおきつしま山といへる姿はよろしく侍るにや。但、猶持とす。

【通釈】

二十七番 左持

広言

53 神山は霞が立ちこめたらしい、—— 今朝見ると、緑の松林はどこなのか、分らない。

右

祐盛

54 春霞が、遠く続いた潮路にたなびくと、どこにあるとも見えない、沖の鳥影は。

左の歌は、面白いと思いますが、「けらし」と言った言葉は、下の句の「いづらみどりの（松のむら立ち）」などと詠んだ様子とは、似合っていないだろうと思われまます。

右の歌で、「そこもみえず沖つ島山」と詠んだ姿は、結構であろうかと思えます。ただし、やはりこれも持とする。

【注】○神山 十番の「注」参照。○いづら どり。○村立 群立。群がって立つこと。○八重の塩路 はるかな潮路。遠く続く海原。○澳津島山 沖つ島山。「島山」は二十三番の「注」参照。

【考察】左の歌は、一・二句が十四番左歌と同じで「神山は霞みにけらし」であるが、続く部分はそう思う根拠を述べて、神山を今朝見ると緑の松林がどこなのか分らない、と詠んでいる。

右の歌は、春霞が八重の潮路にたなびくと、沖の鳥影も見えない由を詠む。これは、次の『後拾遺集』の歌と共通する語句があるので、その影響があるかもしれない。

一、藤原節信)

はるばると八重の潮路におく網をたなびくものは霞なりけり（四ただし右歌は、この節信の歌に比べて、掛詞など用いず、より単純に平明に詠んでいる。そういう特長は左歌も同様であるが。

俊成の判詞は、左歌については「をかしく」と評価する一方、「神山は霞みにけらし」と「けらし」の語を用いたのを、下句にふさわしくないと指摘している。これは十四番左歌に対する判詞に、

けらしとおけるや、かなひてもきこえざらん

と批判していたのと同様の意味かと思われ、「けらし」の示す推量の心は、この場合不要と見たのであろう。ただ、十四番の「考察」で触れたように、清輔の『和歌初学抄』などによれば、「けらし」は「けり」と同様の意味とする見方が当時あったことが知られている。それで左歌の場合も「けり」の心で「けらし」と和らげて言った可能性はあるが、俊成は伝統的な語法を重んじる立場から批判したものと思われる。

右歌については、俊成は、下句をとり上げて「よろしく」と評価している。別に問題点は挙げていないが、判定は持である。左右の歌それぞれを全体的に見て比較した結果なのであろう。

## 二十八番 左

55 下の帯にほそ谷川はなりにけり霞をきたるきびの中山

右勝

安性

親盛

56 武蔵野に朝なくきぎす声すなりかすみの中につまやこもれる

左歌、よろしく侍り。はじめの句やただしたの帯(群書類従)にとり侍りな

むを、右歌は十二番のつらにや侍る歌のおなじ心にはんべるめり。

これは霞のうちにつまやこもれるといへるすがたを(おなじく北岡文庫本)かしく侍るを、

さきの歌は煙とやみゆらんといふにこそ、かの本歌にかなひたれ、

是はただ霞につまのこもれるをたづねわびたるとぞきこゆる。た

だし、左の歌の心はをかしきやうなるを、きびの中山(おなじく北岡文庫本)う(こてい群書類従等)「(群書類従)」

ひなからんすがた、こたいにやあらん。武蔵のの歌も姿につきて

すこしはまさるにや。

## 【通釈】

### 二十八番 左

55 吉備の中山が帯にしたという、細谷川は、下の帯になった、

吉備の中山が霞の衣を(上に)着て。

右勝

安性

親盛

56 武蔵野に朝、雉の鳴く声がするようだ、霞の中に、番いの相手が隠

れているのだろうか。

左の歌は、結構に思います。その初めの句は、細谷川を(古歌で帯に見立てたのを受けて)、専ら下帯にとりなしたのでしようが、右歌の方は、十二番に並んでいたかと思えます歌(「霞をや煙と見らむ武蔵野のつまもこもれるきぎす鳴くなり」と、同様の着想のようです。この右歌は「霞のうちにつまやこもれる」と詠んだ姿が面白いのですけれども、前の(十二番の)歌は、(霞が)

煙と見えるのだろうかと詠むことよって、あの本歌(「武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり」)によく合っているが、この右歌は、ただ霞に「つま」が隠れているのを

捜しあぐんでいる様子と思われれます。ただし、左の歌の着想は面白いが、吉備の中山の古歌を意識したと見える歌の姿は、

古体というものでしょうか。その点、右の武蔵野の歌も、姿に閑して少しは優れているであろうかと思うのです。

【注】○下の帯 下着の帯。○ほそ谷川 細谷川。備中の国の歌枕

『八雲御抄』。次に引く『古今集』の歌(一〇八二)に、(きびの中山)

の辺りを流れる川として歌われる。本来は普通名詞であろう。○きび

の中山 吉備の中山。歌枕。『古今集』の「まがねふく吉備の中山帯

にせる細谷川の音のさやけさ」(一〇八二、神遊びの歌)の歌で有名。

その所在地は明確でないが、今の岡山市の吉備津神社の裏山とする見

方が多い。○こたい 群書類従本、歌合部類本等は「こてい」。いず

れにしても「古体」で、ここでは古風な歌の姿の意であろう。『和歌

十体』(『奥義抄』に挙げる『道洛十体』)では十体の最初に挙げられ

る歌体。

【考察】左の歌は、次の『古今集』の神遊びの歌を前提にして詠ま

れている。

まがねふく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ(一〇八二)

左歌は、これを本歌として、吉備の中山が帯にした細谷川は、吉備の

中山が霞の衣に包まると、帯でも「下の帯」になった、と詠んでい



「かたの、をの」(交野の小野)とあるのが注目される。歌枕としての交野は雉を景物としても詠まれ、その先例に次のような歌がある。

ことわりや交野の小野に鳴くきぎすきこそは狩の人はつらけれ  
『金葉集』二八三、内大臣家越後)

右の歌は、神山にたなびく霞を、玉垣の外に、神域と世俗の世界を隔てる存在ととらえる。そういう霞のとらえ方を趣向とするが、これも平明な詠み様である。

俊成の判詞は、左の歌については、下句を「宜しく」思われると評する一方、上句で霞が「声はへだてず」と詠んだ着想を「常の事」と批判している。これは例えば、

つくばねの山をばかすみこむれども声はへだてぬ谷の下水(『田多民治集』六)

のような歌が前に詠まれているからであろう。

右の歌については、霞を「いがきの外の(へだて)」と詠んだ着想を、「をかしく」見えると評価し、勝としている。

三十番 左勝

59 さびしさをとふ人ぞなき山ふかみたちよる嶺の霞ならでは

右

重保

60 まつ山のみどりへだつる春霞今一しほの色をかくすな

左右の歌、こころすがたとりどりにみゆ。左は姿いうにして、たちよる峰のかすみならではといへるも、心ほそきこゆ。

右はみどりへだつる春の霞(春霞(群書類従))などいひて、今一しほのといへる、をかしく待るを、すゑの句にかくすと(かくすなと(平安朝歌合大成))いひはてたるにや、すこし褻なる心ちし侍らん。左歌猶よろしく侍るにや。よりに勝と申すべし。

【通釈】

三十番 左勝

59 寂しい私を、訪ねてくれる人はない、——山が深いので、峰の霞

佐

が立ち寄る外には。

右

重保

60 松山の、緑を隔てる春霞よ、春が来て一層まさる松の色を、さえぎって隠すな。

左右の歌は、その心も姿もそれぞれ違って見える。左の歌は姿が優美で、「立ち寄る峰の霞ならでは」(訪ねるものもない)と詠んだのも、心細く思われる。

右の歌は、「緑隔つる春霞」などと言っておいて、「今一しほの色を」と詠んでいるのが面白く見えますが、下の句に「隠すな」と言い切っているのが、少々日常的な表現という感じがするでしょう。うか。それで左の歌がやはりよろしいかと思えます。そのため左を勝と判定しましょう。

【注】○褻。日常的、私的であること。「晴」が公的なことを意味するのに対して言われる。

【考察】左の歌は、山深くに寂しく暮らす自分を、峰の霞の外には訪れる人もない旨を詠む。霞が「立ち寄る」と言ったのは、擬人的な表現と見られるが、霞が立って近寄る意を含めたのであろうと思う。

右の歌は、その用語から見ても、次の歌によって詠まれたと思われる。ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり  
『寛平御時后宮歌合』三九、『古今集』二四、源宗子)

これを本歌として、松山の緑を隔てる霞に、春が来て一段とまさると見える松の色を隠さないよう、呼びかける形に仕立てた作であろう。俊成の判詞は、左歌については、姿が「優」であり、下句が「心細く」思われるとする。

右歌については、上句から下句へ続けたあたりをとり上げて「をかしく」と評するが、一首の終わりに「隠すなと言ひはてたる」点を「すこし褻なる心ち」がすると指摘している。「隠すな」と禁止の形で言い切ったのを、日常語風の言い様で、公的な歌合の歌の表現としてあまり適当でないと批判したものであろう。